

「職人歌合絵巻（高松宮家本）」 28.7×675 cm 室町時代後期ころ 本館蔵 H-600-1149

「職人歌合絵巻」は、さまざまな職人が対になって和歌を詠むという仮託の歌合わせ（歌比べ）で、鎌倉時代から何種類かの絵巻作品が作られている。この「高松宮家本」は、建保2年（1214）の秋、京都の東北院で念仏会の際に行なったという趣向の、「東北院職人歌合」と呼ばれる種類である。

登場する職人とその組み合わせは、「医師・陰陽師（おんみょうじ）」、「鍛冶・番匠」、「刀磨（とぎ）・鋳物師（いもじ）」、「巫（かんなぎ）・博打（ぼくち）」、「海人（あま＝塩焼）・賈人（こじん＝行商人）」という五番十種、判者は「経師（きょうじ）」である。

残念ながら表面が汚れているが、職人の絵は風俗史の資料としても価値があり、韃（ふいご）を踏む鋳物師の絵は特によく知られている。

「高松宮家本（たかまつのみやけほん）」とは、世襲親王家の一つであった有栖川宮家（ありすがわのみやけ）の蔵書を大正時代に高松宮家が受け継ぎ、和歌関係などを多く含むその資料群が、文化庁を経て国立歴史民俗博物館に移管されたもの。この絵巻も、宮廷社会との関係の中で作られたものであろう。